

# 「出生前診断」という技術

## 正当性を保証する装置

立正大学 石田裕美子

### 1.目的

報告者の関心は「技術」が与える社会の影響についてである。様々な新しい「技術」は素朴に「新しい技術が開発された」、「便利になった」と理解されるだけでなく、パラダイム的であると共に、パラダイムに準拠的な技術である、とも理解できる。つまり、「技術」はある特定の準拠枠組の中に位置付けられ、その準拠枠組の中の正当性に方向づけられ、またその準拠枠組の正当性を再生産する機能を持つと考える。

本報告では、以上の「技術」観から、まずは出生前診断をある正当性を生成する機能を有するということを明らかにすることを目的とする。

### 2.方法

親の特徴が子供に受け継がれるという「遺伝」の現象についてはメンデルの発見(19世紀)とその再発見(20世紀)以降、どのような機序をもって受け継がれるのか(あるいは受け継がれないのか)という関心を起こしてきた。「遺伝」は特徴である「形質」とこの形質を発現させる「因子」によって起こりうると考えられ、遺伝子の概念は1930年代に現在の形に成立したと指摘されている<sup>(1)</sup>。因子であるタンパク質の組み合わせモデルから、1940年代からDNAモデルが提唱され、現在の遺伝子概念が決定づけられている<sup>(2)</sup>。

このような「遺伝子」の概念の歴史過程に着目したジャン・ドゥーシュの議論<sup>(3)</sup>を参照し、報告者は「遺伝」の概念が①「血」によって受け継がれる形質として把握されてきたこと、②しばしばこの形質は「能力」の概念と結びつけられてきたこと、③「血」による概念は集団間の能力差に注目したが、現代のDNA技術により個の遺伝子が注目されてきていることを明らかにする。そして、出生前診断とどのような形で接合し、社会へ還元されているかを説明する。

### 3.結論

能力が受け継がれるという「遺伝」の概念の発見とともに、集団の能力の計測が科学の一分野となった。優生学の名付け親であるゴルドンは指紋による犯罪者の類型化や骨相学による人種や集団の優劣などの計測を行っている。これらの集団間の計測は移民や犯罪が国家の問題と把握された20世紀初頭にみられたが、1950年代に発見されたDNAの二重螺旋モデルによって集団に多く見られる能力から、個人の能力や遺伝的疾患に関心がシフトした。

これらは出生前の予防的対策として政策にも反映されてきたことを指摘する。

(1) J Med Philos. 2002. *Historical development of the concept of the gene*. The Journal of Medicine and Philosophy: A Forum for Bioethics and Philosophy of Medicine, Volume 27, Issue 3:257-86.

(2) J Med Philos.1993. *The concept of the gene: short history and present status*. The Quarterly Review of Biology, Vol. 68, No. 2: 173-223

(3)ジャン・ドゥーシュ(2015)『進化する遺伝子概念』みすず書房